AIを恐れる議論から、被害を減らす議論へ。

攻撃者と防御を区別し、減らした対策の事例から、条件付きで学ぼう。

01 なぜ騒がれるか

重なって見える背景 — 一つが原因とは限らない

被害の実体
現実に深刻な被害がある

公表の流れ
被害の公表が増え、早まっている

新たな手段
攻撃者がAIを使う事例が現れた

実害・公表・新技術への注目が重なっている。AI利用と被害の根本原因は分けて評価する。 公表や発見の増加をそのまま悪化と断定しない。

↓

02 3つの提言

提言 01

「気をつけて」で済ませず、安全な初期設定を広げる

注意喚起だけに頼らず、認証・更新・復旧の手段をサービス側で使いやすく整える。利用者の見分けの負担も減らす。

提言 02

減った事例を、条件付きで共有する

証券口座の不正取引件数の大幅な減少を一例として共有。AIやパスキー単独の成果とは断定しない。

提言 03

物差しを、被害と回復へ変える

実損失・業務停止・復旧までの時間を重視。公表や発見の増加をそのまま悪化と評価しない。

↓

03 締めの言葉

「危険を小さく語る必要はない。対処できる力まで小さく語らないことだ。」

「AIを犯人にするより、攻撃を成功させてしまう条件を減らそう。」

出典：警察庁 サイバー情勢／MM総研／Mandiant M-Trends 2026／金融庁 — 調査日 2026年10月31日

URLノート: npa.go.jp / m2ri.jp / cloud.google.com / fsa.go.jp